

【9】 むすび

以上、説話的色彩に彩られた提婆達多伝承の中から、原始仏教聖典の編集者たちの抱いていたであろう提婆達多像を通して、彼の実像に少しでも近づこうという試みを続けてきた。

提婆達多の出自については北方系の伝承と南方系の伝承ではまったく異なる。北方系の伝承では提婆達多は阿難と兄弟であって、父親は浄飯王の弟の誰かとされるから、釈尊とは父方の従兄弟ということになる。しかしながら南方系の伝承では、提婆達多は釈尊の妻の弟でデーヴァダハの出身であるが、母親は浄飯王の妹であるから釈尊とは母方の従兄弟でもあることになる。もちろんこのどちらが史実に近いかは分からないが、阿難と共に出家したことや、後の破僧のことなどを総合的に考えると、南方系の伝承の方が合理的に理解できるので、本論では南伝系の伝承を採用した。

彼の出家以前の幼少青年期の事績は説話的なものしか残されていない。それは妻選びなどから釈尊と技能において拮抗したという内容であるから、釈尊との年齢差を考えるとそのようなことはあり得ない。

20歳頃に達したころ、提婆達多はアヌルッダやバツディヤ王や阿難やキンピラ・バグそれにウパーリなどと一緒に出家した。その頃釈尊は成道後10年くらい経過して、45歳前後になられていた。提婆達多はのちに釈尊が老齢になられたことを口実にサンガの委譲を要求することになるが、釈尊との年齢差は25歳くらいであったものと考えられる。そのころは、釈尊の弟子たちが三歸具足戒でそれぞれの弟子を取ることを許されていて、提婆達多も阿難も釈尊から直接に善来比丘具足戒で比丘となったのではなく、その名は詳らかにしないが、おそらくは三迦葉の仲間であったと考えられる比丘を和尚として出家したものと考えられる。

出家して10年間は和尚に依止して内住弟子として過ごさなければならないという規定のもとづいて、提婆達多はおそらく12年間ほどは善心に修行したものと考えられる。和尚は頭陀行者的な修行者であったから、提婆達多もどちらかといえば苦行的な修行をしたであろう。

和尚から独立して以降の提婆達多は専ら神通力を得るための修行に熱中したとされる。おそらく彼は野心家であって、神通力を得ることが民心を獲得するのにもっとも有効であると知っていたのであろう。そのためにも激しい苦行をしたのではないであろうか。そして彼の努力が実って、次第にその名がインド社会に広まることになった。それは師匠のもとを離れてから9年ほどたったころである。

そうして彼は王舎城にやって来て、新興のマガダ国の王子であった阿闍世に引き立てられることになった。彼を悪人に仕立て上げるという意図を持っている原始仏教聖典では、そのために提婆達多は阿闍世の唾まで飲んだという伝説を作り上げた。その時阿闍世はまだ20歳前後という若さで、提婆達多は41歳になっていた。

若いにも拘わらず阿闍世は父王から王権を篡奪したいという野望を持っていた。誕生の因縁やら、アバヤ王子との関係やらがそれを急がせたのかも知れない。提婆達多はこのような権力争いを積極的に利用したのか、それとも阿闍世とビンピサーラの方が宗教の権威を借りようとして、釈尊と提婆達多を利用したのかは分からない。ともかく王舎城の政治的・宗教的状况は、ビンピサーラと釈尊のペア、阿闍世と提婆達多のペアに分かれてあい拮抗するよ

うな状況となった。あるいは阿闍世と提婆達多の方にはジャイナ教の勢力が加担する形になっていたかも知れない。おそらく仏教のサンガは全出家者を統合するような中央集権的な組織はなく、その実際的な活動は和尚を中心としてその弟子からなる現前サンガが基礎となっていたから、提婆達多のみでなく各地にさまざまなグループが存在していたのである。

このようにして次第に勢力を蓄えた提婆達多は、その6年後、すなわち釈尊が72歳、提婆達多が47歳の時にいよいよ行動を起こした。釈尊の指導下において、おそらく舍利弗と目連もそのメンバーであった王舎城の比丘集団をも、その傘下に取り入れたいと釈尊に申し入れたのである。しかし釈尊はそれを一言のもとに拒絶された。そのうえに提婆達多を破門する宣言のようなものまでが出されてしまったために、提婆達多の方から和解をする可能性が断たれ、破僧のやむなきに至ることになった。

提婆達多側の破僧の名目は「五事」であって、それはむしろ古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、提婆達多としては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。あるいは提婆達多としてはそれは本心からのものではなかったかも知れないが、しかし形式上は彼自身もそういう生活をしていたのである。一方の釈尊の指導下にあったグループは、釈尊自身の中道的・合理的な指導のもとに、その修行方法は徐々にゆるやかになりつつあった。

王権をめぐる権力闘争の方は、ピンビサーラ王が老齢になったということもあって、平和裏においてか、それとも血なまぐさい闘争がなされたのかは分からないが、結果的にはおそらく王の方から阿闍世に王位を譲ることになった。こうして阿闍世が王舎城の支配権を握ることになった。一方の仏教教団の方はその教団の創始者であるという強みがあるとともに、三宝帰依具足戒や十衆白四羯磨具足戒法で比丘となった新しい修行者が増えてきていて、古い苦行的な修行は好まれなくなっていた。そこで釈尊グループの方が多数派を占めることになり、提婆達多の破僧は失敗に終わった。しかし提婆達多のグループも依然として存続したのである。

阿闍世とのぎくしゃくした関係もあって、そのあとの釈尊教団はその本拠を次第に王舎城から舎衛城に移すことになった。ちょうどその頃から、コーサラ国の波斯匿王がその妻であるマリックカー (Mallikā) の熱心な勧めもあって、篤信の仏教信者になり⁽¹⁾、仏教を手厚く援護するようになったということも大きい。しかしながら王舎城で釈尊一派の仏教が払拭されたということはなかった。それは破僧事件以後に仏教に帰依した阿闍世を描いた『沙門果経』に明らかであり、また釈尊の入滅後に行われた第一結集では、500人もの出家比丘が同時に一夏を過ごすためには王舎城しかないということで、王舎城が選ばれたことが何よりの証拠である。あるいはこれは王舎城に残った提婆達多一派に対する釈尊教団の示威行動という意味もあったかもしれない。阿闍世も当時の宗教的風土にしたがって、提婆達多一派を支援しながら、釈尊教団を弾圧するという事はなかった。

われわれが今持っている原始仏教聖典は、この釈尊教団を継ぐ者たちによって編集されたものであるから、その対立者である提婆達多は極悪人としてのレッテルが貼られ、その一派も教団史から抹殺されることになったが、実際には連綿とし生き続けたのであって、それが法顕や玄奘・義浄などの記録に残されたのである。

(1) 今秋に刊行される予定の『印度哲学仏教学』第21号(北海道印度哲学仏教学会)に、「コー

提婆達多 (*Devadatta*) の研究

サラ国王波斯匿と仏教」なる論文を執筆する予定である。これをご参照願いたい。

【付記】本稿は、本澤が資料を収集してこれをもとに粗原稿を作り、これらを森が再点検した後に（ただし【5】【6】を除く）最終原稿として完成させたものである。